山本雅之　さん
名古屋水道労働組合・元委員長

NO. 4

随想。私と自治体のしごと

地方財政危機と水道事業の赤字続きのなかで
業務改善と市民への清潔な水の提供を心掛けた
やがて水源林を守るために木曽川の源流に目を向ける

私が組合本部役員を始めた昭和50年代は、自民党政府のインフレ政策、自治体に対する超過負担の押しつけなどで、地方の財政は大きな赤字を抱え、住民サービスの切り捨てが進められようとしている「地方財政危機」の最中でした。

名古屋の水道・下水道事業も赤字続きで、水道料金の値上げが議会で議決されました。数か月後の某夕刊紙では、「水道料金値上げ後も、いぜんとして市民サービスの向上が見られない。赤水苦情、漏水修理受付など市民からの電話受付でも、対応に慣れた事務職員に比べ技術職員のまずさが目立つ」と酷評していた。

問題なのは、「市民の苦情、要求」を予算化せず、社会の技術革新を導入せず、工具の近代化を怠ってきた当局の姿勢が、市民の要望に応えきれない原因にあるとして、組合の方針で業務改善の職場要求闘争をすすめた。しかし、市民に安全で清潔な水を供給するには、名古屋の水の水源地を大切にしないといけないという思いから、木曽の森林に目を向け、職場の労使間を超えた取り組みに関わっていくことになりました。

水は人間が生きていくうえで欠くことのできないことは言うまでもありません。【蛇口の奥は木曾の森林】と言われる。住民にとって木曾の森から流れる水より、蛇口から出る水の方に関心が向くのは当然です。しかし、木曽川の上流では過疎化がすすみ、間伐もできず山は荒廃し、「水の枯れた木曽谷」という危機が迫っていました。

名水労（名古屋水道労働組合）はこうした背景のもと水源林を守る立場から、木祖村との交流を深め、年２回の間伐作業のツアーを実施し、当局の新人研修にも木祖村の間伐作業を取り入れてもらい、職員の水に対する意識を高めてきました。平成14年には間伐作業に使う鉈（なた）と鋸（のこぎり）セット15組を木祖村に進呈、同16年には木祖村村長の要請にこたえ、名水労と当局との連名で募金に取り組み、森林整備に必要な機材を寄贈しました。こうした取り組みから、名水労は木祖村表彰条例によって木祖村議会から表彰されました。

この間、前後して名水労は、長良川河口堰建設、徳山ダム建設に対しても市民の立場から建設に対する問題提起をし、無駄な公共事業を止める運動に参加してきました。今でも多くのＯＢ諸氏がこうした運動の中心的な役割を果たしていることに勇気をもらっています。